

「話すこと・聞くこと」の学習の効果的な教材を求めて

和歌山市立 小学校

はじめに

現行学習指導要領では、国語科の目標に新たに「伝え合う力を高める」ことが位置付けられている。情報化・国際化社会の中で互いの立場を尊重し、自分の考えを正確に相手に伝え、相手の言うことを正しく理解することがますます重要視されるからである。この「伝え合う力を高める」ためには、私はまず「話すこと・聞くこと」の学習に力を入れなければならないと考えた。

先日の授業の指導案に次のように書いた。

5 指導にあたって

本校の本年度の研究主題は「一人一人が生き生きと活動し、豊かに表現する子ども」伝え合うことの楽しさを求めて」である。

四月当初の子どもたちには「聞き合い、話し合っている」とする雰囲気があった。昨年度までの積み重ねの成果であると言える。しかし、そのような子どもたちの中にも、「2004/4/13」はつきり言えよ」と言われて自己紹介の時に涙ぐんでいる「子(る児)や」、「2004/5/25」ノートに書いたことを言うとき、泣きそうな声になっていた「子(7児)がいた。「2004/5/26」めずらしく意見を言った「子(7児)がいた。それやったらアヤで」、「その理由だつたらイではなくてアの方が筋が通っている」という意味」とつぶやかれ、「あつ、そつ」と言っていてすぐに認めて座つてしまつ「子(る児)もいた。

そして私との学習が続くにつれて徐々にではあるが、積極的に「聞き合い、話し合っている」とする子が減ってきた。発言に積極的・意欲的な子ども、そうでない子どもがはつきりあらわれてきたのである。(略)

このような子どもたちの実態から「話すこと・聞くこと」の学習形態は、普段の国語の授業に限りなく近いものが望ましいと考えた。なぜなら、例えば少人数のグループでの話し

二

教材としての長所

投書欄の記事を教材として取り上げる長所を次のように考えた。

短い
字数制限があり段落数も多くないので、子どもたちは読み通すことに抵抗感はないと考えられる。

刺激的である
意見文なので刺激がある。読み手に賛成や反対の情が起きやすい。

論理展開を学べる
字数の制約を受けてストリートに論理展開がされる。ときには短さ故に無理な展開が見られることもある。飛躍があれば論理の飛躍を見抜く学習にも発展できる。

身近な話題である
身のまわりの身近な出来事を取り上げているので考えやすい。(むろんそういう記事を選ぶのであるが)これは自分自身の価値観で考えられるので話し合いに参加しやすいことが多い。事前調査をしてから話し合いをするという授業に比べ、調べた情報量の多寡による授業に対するモチベーションの差が出にくい。

国語の授業スタイルと近似性が強い
記事を読み難語句の意味を知り、書かれたことをもとに考えるという学習スタイルは、普段の国語の「読むこと」の授業と強い近似性がある。つまり子どもたちは「読むこと」の特別な授業をしているという意識は少ないであろう。い

合いのように普段とは違う、いわゆる特別な場で話せたとし
ても、それは少人数だつたから話せたという事実から逃れ
れないからである。特別な場であつたからこそ話せたとい
えを話すことができたという経験は、少人数の中で話して
よつという動機になりうるであろうか。私自身の経験から
うと、それはつながりにくい。

ならば大人数の中でも思わず話したくなるような場を設ける
ことが必要がある。普段と同じような場で、思わず熱く自分
の思いを話していた、というような経験をさせることが大事
だと考えた。それが子どもたちにとって、成就感があり楽し
い授業になるのではないかと考えた。そのような授業の教材
として、新聞の投書欄の記事を教材として使うことを考えた。

三 実践例

つもの国語の授業と変わりないと考えるだろう。
この違和感の少ない状況で「言いたいことを発言できた」「言いたいことを伝えられた」という実感は、自信につながり、学ぶ意欲の向上につながって行くのではないかと考える。

本年度行った実践の中から三例を取り上げる。

(一) 読売新聞5月9日付け。「子どもに謝らせる『しつけ』は必要」という題の投書である。要約すると次のようになる。
「母親と一緒に電車に乗ってきた幼稚園児くらいの子の足が私のひざにぶつかつた。しかし母親が私に謝っただけで子どもに謝らせなかつた。子ども自身に謝まらせるように教えるべきではないか」という文章である。

【第一時間目】5月27日実施。
先生が読むので読めない漢字に読みがなを書きました。

もう一度読むので、段落番号をつけましょう。
読みましょう。(追い読み一回、一斉読み一回)

第一段落を読みましょう。(一斉読み)

意味の分からない言葉はありませんか。
何となくその意味が分かるという人、どうぞ。(子ども

の後で意味を説明する)

第二段落を読みましょう。(以下、同じように続く)

登場人物を書きましょう。
それぞれ何歳くらいですか?

なくてもいい段落は何番ですか?(時間がなかったの
で省く)

筆者が一番言いたいのは何段落ですか?
筆者が一番言いたい文はどれですか?
あなたは「母親が自分が謝るのではなく、子ども自身に
謝らせるよう教えるべきではないでしょうか」とい
う考えに賛成ですか反対ですか?自分の考えを書きま
しょう。(15分間で原稿用紙に考えを書く)

【第二時間目】5月28日実施。

反対派は三人。理由は、「幼稚園児なので小さくて謝らせ
るのは無理だ」と言つた。

賛成派の理由は、「自分が謝るということを知らなくなる
大人になつて謝ることを知らない人間になる」「やつた
子が謝るべき」「なんでもお母さん、謝つてきて」と言う
ようになる。「やつた子が謝らないと、母親が謝つても心
こもつていない」「自分も幼稚園の時にしつけをつけられて
いた」「謝り方を知らなければいけない」などである。

人数が多い賛成の子が優勢に意見を出していたが、反対派
の三人もよく反論ができた。その反対派の主な意見である。
「私たちは、絶対に謝らせないと、言っているのじゃなくて、
幼稚園の子だから今は小さすぎるから謝らせるのは無理だか
ら反対と考えている」「や「みんながいる電車の中で謝らそ
うと(しつけ)をせず、電車の中では母親が謝つておいて、あ
とで自分の家などで教える方が電車に乗つて他の人の迷惑
にならないか」「や「小さくて意味が分からぬのに「ごめん
ないか」「や「大人になつて謝ることを知らない人間なんてい
ない」などである。

この授業では国語や社会、理科などの授業ではなかなか意
見が出せない19児が、数回、自分から考えを述べることで
きた。授業後ほめると嬉しそうだった。その後の算数の時間
も全然表情が違つた。そしてこの日、何かと私に話しかけに
来た。

彼にとつてこの話題は考えやすかつたのだろう。そして三
人の少数派の中でがんばれたということがなんらかの自信に
つなげばと期待した。

実際この子は、一学期の間に学習に取り組む姿が変わつた。
得意な分野の学習(メダカ)で活躍できたことや家庭環境の
好転などもあるが、この授業がきっかけの一つになつたと
言つても過言ではないと考えている。

(二) 二学期で一番おもしろかつた授業という感想が多かつた。
11月2日実施。

投稿記事の要旨は次の通り。

「新潟中越地震があつた日、ほとんどのテレビ局は緊急特
別番組を報道した。その影響で楽しみにしていた通常番組が
見られなかつた。これはやりすぎではなかつたか」というも
のだ。(産経新聞 10月25日付け「談話室」)「通常番組が放映
されず残念」

子どもたちもこの地震の緊急特別番組を見ている(影響を

いやん。それと一緒にで新潟の人とかもその近くに住んでい人も巨大地震で心配する人たちも同じ気持ちで、たくさん緊急特別番組やっていたらちよつと情報とかも多かつたら違つたりするやん。全部がつ緒やつたからおかしやん。だから、いつばいやつていた方がいいと思います。(以下略)

この場面では26児のほか、発言が苦手と私が見ている二
人の子(7児、28児)が自分の考えを言えている。
次の場面である。

26児：賛成なんだけど、黒板に離れているところはしなく
ていい、と書いてあるけど、一切しなくてはいいいと
いうわけではなくて、そこらは、ポツポツとやつ
たらいいんじゃないかな、と思う。

T：ずつとしないで、ニュースの時間みたいに。
26児：で、その地震情報を見ていて、もしもなんか、あ、
こういうことあつたんだな、とだいぶ分かつてきた
ら、他のテレビに変えようと思つてもニュースばつ
かりだつたら、なんか(聞き取れず)の方を見ても
仕方がないと思うから、ま、そういうことです。

12児：今の意見聞いて、もしそれでアニメに戻り出すつて
いうや。で、アニメに戻つて、いいところ、プ
チつてまたニュースに変わつて、またアニメに変わ
りますつて、それでまたちよつとサヨナラ、つてい
う感じになつてきて、またプチつてきれて、それこ
そなんか変になれへん？それに、もしそんなことにな
るのだったらニュースを普通に続けていつた方が
まだましだと思ひます。

22児：そういうプチつていうことせえへんように、地震
がまたあつた時に、すぐにプチつてやらんとコマ
シャルになるまで待つとか、色々あると考へます。

26児：祥太くん返して、そんなにプチプチプチプチ変わ
るんだつたら、その時は、地震情報だけをやつたら
いい。(以下略)

26児の考えは後退していつてはいるが、そういう状況にな
つても自分の考えを言えているということはそれまでの彼に
は見られない姿だつた。

(三)12月7日実施。産経新聞2007年5月31日付け。談話室「携
帯電話は中学生に必要な
授業の流れは、前原研修センター所長、田中康義氏がピテ
オを起こして、「ご自身の論考の中にまとめてくださつてい
それを引用させていたたく。

授業開始

子どもたちは、前時、この「記事」を読み、自分
の意見をノートにまとめている。そして本時「自分
の考えを発表し友達の考えと比べる」のである。

私、教室の窓側、中ほどに位置を占め、ビデオを構
える。
授業が始まる。

『今朝、書いた自分の考えを見直し、これは言いた
いと思うところに、マークをつける。三分』-担任、
中年男性教員、穏やかな口調である。人間巡視(古風
な表現、今も使われているのか?)、一人女の子の前
にひざまずき、何事か話し掛ける。しばらく、その子
が先生のもとに駆け寄り、一言、耳打ちする。授業中、
しばしば見かけた光景である。いわゆる「築地久子方
式」である。気になることである。後の「協議会」で
そのことの効用について質問する。

担任の指示-「携帯電話は中学生に必要な。それ
では、セーノ」-で、例の「記事」を一斉に音読する。
これもこの教室の作法なのか。

『それでは、意見を聞きましよう』
一人の男子を指名する。以後、相互指名によつて、
次々と自分たちの意見を発表していく。なかなかスム
ーズな滑り出しである。

反対論の続出

『携帯は中学生に必要な』という意見に反対で
す。塾の帰り、親との連絡を取るために必要だからで
す。

「賛成から反対に意見を変えました。その理由は、
塾なんかで、携帯で連絡しないと迎えにきてもらえな
いんですよ。だから、メールするのはあまり良くない
と思うけれど、連絡するぐらいいいと思うので、反

対に変えました」(男子)

まずは、塾通いの体験による携帯の利便性からの反論である。

「僕も岡田さんの意見に反対です。『毎日メールしている、温かい人間関係が薄くなりそうです』とありますが、メールしているとアドレスを交換したりして、友達も増えたりして、逆に温かい人間関係は高くなる」と考えたので、反対です」

「反対です。例えば、はずかしがりやさんがいて、話すのはオドオドして、話すのがこわくて、・・・でもメールなら文字を打つだけだから、・・・だから反対です」(女子)

緊張からオドオドした発言であるが、これも自己体験に発するか。ただ単なる利便性への着目だけでなく、投書者「岡田さんの考えの核心部分に踏み込んだ反対論である。」

「賛成」から「反対」へ、繊細に浮遊する子どもの感性
次も女子である。どうやらこの子も「賛成」から「反対」に変わったようである。

そのことを説明するのにややしどろもどろ。思いは強いのだが、その自分の複雑な気持ちをつましく伝えられないもどかしさを自分でも感じていっているようである。

「初め賛成と考えた理由は、例えば、AさんからBさんにメールうつとずるやろ。」

「そしたら絶対に、絶対にとは言えやんかも知らんけど、返すやん。『馬鹿じゃない』と言われたら、真に受けてしまうやろ。だから傷ついてしまうやろ。傷つくこともあるやろ。だから、(岡田さんの意見に)賛成だったんです。」

「反対に変わった理由は、体の不自由な人には必要だ」と言っているやろ。だけど、車椅子の人だからできやんと決めつけているのは差別だと思えます。」

「それに、全員が全員そうだとは言えないけれど、友達、うまくつくれない人もいるんとちゃう? (うまくつきあえる人もいるけど)、そんな人たちにとつて

携帯は友達ができる唯一の道具なんですよ」(女子)

ビデオを再生しながら肉声を活字にしているのである。発言のニュアンスを忠実に再現することは至難の難しさに起因する。

「傷つけられたくない。傷つけたくない。そんな自分の思いがどう他者に受けとめてもらえるか。絶対に、絶対には言えやんかも」とか「全員が全員そうだとはいえないけれど」とかにみられるように、自分の細やかな感性を何とか正しく受けとめてもらおうとする、そんな必死の思いが彼女の発言をして、かえって受けとめにくくさせているのではないか。高い感受性とそのしどろもどろさに見られるのである。付記すれば、私

はかの「佐世保同級生殺害事件」のことを念頭しているのである。かの「事件」は事件としてはきわめて特別な事件ではあるが、子どもたちの無意識の感性の次元では理解を超えるものではなかったのではないか。

まさに教師の「出番」だった。子どもたちの「意見」はいきなり核心部分にせまっているのである。それをクラス全体のものとして確認させ、単なる「意見」の表明にとどまらず、相互の「意見」がからみあう「議論」へと高めていくために、教師による一定の「介入」

がこのあたりで不可欠だったのである。しかし、教師はそのチャヤンを見過ごした。あえて見過ごしたのかどうか。(このことについても後の「協議会」で質問する。)

賛否がからまりかける

「会ったこともない人にメールし、アドレスを教えるなんて・・・」(男子)

「岡田さんの言うように、僕は中学生は小遣い稼ぎのためにやっているんだから」(男子)

「僕は岡田さんの意見に反対で、最近、ぶつそうな世の中だから、携帯があれば、親子で連絡が取れるから」(男子)

「恥ずかしがり屋さんは、恥ずかしいからメールア

ドレスも聞けないと思う。それにぶっそうな世の中と
いつてたけど、連れ去られた時点で、まず連絡など無
理だと思えます」(男子)
「友達が増えると言っていたけど、メールアドレス
を知らなかったら、友達が増えないと思う」(男子)
「岡田さんは中学生には必要ないと言っているけど、
これは自由を奪っていることだと考えるし、自分のこ
とは自分で考えるべきです」(女子)

これまで、「反対」意見ばかりだったが、初めて「賛
成」意見が出ることによって、賛否両論がからまり始
める。「議論」の段階へ一つのステップ・アップであ
る。ただ、ここで「岡田さんの意見は中学生の自由を
奪うことだ」という、抽象度の高い意見が飛び出した
が、これを他の子どもたちは受けとめたか。

様々な「質」の意見が

「反対です。おじいさんのことを例にあげると、足
にけがをしたんですよ。偶然、携帯があつて、周りに
助けを求めたんですよ。中学生ももしそういうことが
あれば助けを求められるので、携帯は必要だと思います」
(男子)

「車椅子に乗っている人も家の中では動けるんだか
ら、携帯電話はいらないと考えました」(女子)

「電話もあるし、携帯を持っていて、出会い系サ
イトなど、親に心配させるし、お金もかかるから岡田
さんの意見に賛成です」(女子)

「もしも、遅くなっても、携帯があれば何時に帰る
とか連絡できる」(女子)

「さつき、リヨウマ君が友達ができなければ出会い
系サイトで友達をつくればいいといったけど、もし相
手の人が悪い人で嘘ついたりして、もし今度会おうと
か言ってきた、連れ去られたらあかん」(男子)

「岡田さんの意見に反対です。前に奈良で誘拐事件
があつたけど、この頃、小中学生の誘拐事件が多いか
ら、携帯を持つていたら安全だし、奈良のあんなに
んも小学一年生で携帯を持たないから、あんなにた
くさんの手がかりが見つかつたし。岡田さんはメール
のことを言っているんだから、メールのできない話だけ

の携帯なら事件に巻き込まれることもないし、人間関
係も冷たくならないと思えます」(女子)
「私は賛成です。迎えにきてもらうためだけならい
いけど、最近では、携帯で遊んだりするのが多いから、
岡田さんの意見に賛成です」(女子)
「近くに公衆電話がないこともあるし、・・・」(女子)
「携帯はお金がかかると言っていました。電話だけ
のならあまりかからない」
「かん違いをしている人がいると思います。『携帯
は中学生に必要な』という意見に賛成している人は、
事件とかメールとかばかり言っているけど、連絡を
とるためには必要なんだから、『携帯は必要ない』で
はなく、『メールは必要ない』と、賛成の人は考え直し
たほうがいいと思います」(男子)

賛否両論それぞれにごく単純な意見もあるが、なか
には、最後の男子の「意見」のように、単に自分の「意
見」を表明するだけでなく、それぞれの「意見」に対
して分析的に批判する「意見」が登場してくる。これ
は、ただ、他人の「意見」を聞き流すだけでなく、そ
れを批判的に受けとめてのものであると思われる。

議論が停滞しはじめる

「写メールなんかできない、電話しかできない古い
携帯を買うん？」(男子)

「写メールは別だけど、かりに誘拐されても電話は
できないけど、メールならしゃべらなくてもいいから
連絡がとれるかもしれない。会って親しくなつて初めて
アドレスを交換するのだから、だから携帯は必要だ」
(男子)

「そろばん習ってるんやけど、もし連絡取りたかつ
たら、先生が電話貸してくれるから」(女子)

「友達とけんかして、直接会って謝るのも嫌だし、
メールで『ごめんなさい』と言ったりした、少しは楽
になる」(女子)

「一番最初にあるように、『出会い系サイト』なん
かで事件が起こっているんだから、やめといたほうが
いい。また、四年生の時に、手紙は手書きの方がいい
という人が多かつたよね」(男子)

「手紙だったら、着くのがいつになるかわかりませ
ん」(男子)

「出会い系サイトで連れ去られた嫌だからです」(男
子)

「メールで『ごめんなさい』だけだったら嫌です。
『賛成』の人に聞くけど、中学生になっても携帯はい
らないのですか?」(女子)

議論が停滞しはじめ。同じような「意見」が繰り返
し話されてくる。疲れてきた、飽きてきたか。それ
に「意見」がだいたい出尽くしたのか、他の「意見」
への直接的な反発に留まり、新たな議論の高まり・深
まりがみられない。

教師の「まだ、意見のある人は?」に6人が挙手す
る。「じゃ、その意見を聞きましょう」

「先生に借りるって誰か言っていたけど、塾によつ
て違うと思います。借りられないところもあります。
また、出会い系サイトも開かなければいいんじゃない」

(男子)
「お金がかかるって言っていたけど、公衆電話は10
円取るやんか。でも、携帯の方が、安いで、公衆より」
(男子)

「賛成の人はメールのことしか考えていないけど、
携帯電話全体のことを考えなければ。元々、携帯は声
を伝えるものだったんで、その点、いろいろと連絡す
るのに便利だし、電話ボックスが減ってきたのは、携
帯が増えてきたからで、そう考えると携帯は絶対に必
要だと考えます」(男子)

「電話ボックスがどこにあるかわからんし、第一お
金持ってたかからんし、携帯で連絡した方が
ずつと早いし・・・」(男子)

終業のチャイムが鳴る。
「自分が思ってた意見を書きなさい」

この授業でもいつもとは違うがなばりを見せる子がいた。
それは21児である。彼女は一学期は自分からの発言がほと
んどなかった子である。順番に答えなどを言うような場面で

しか発言しなかった子だ。
二学期になって、自分の考えを発表する姿を見ることがで
きるようになった。その子が本時では次のように言った。

21児：わたしは、反対で、理由は、例えば、携帯電話つ
てメールとかできるやろ?メールのときに、例えば、
恥ずかしがり屋さんの人とかいたときに、お母さん
に(聞き取れず)そのときに、恥ずかしがり屋さん
だったら話するのがとても怖くて、オドオドしていて、
結局、誘いができなくなることもあると思うし、そ
の場合メールやったら、文字で伝えることもできる
し、絵文字とかもできるし、メールの方が楽しい…
から反対にしました。

この内容は、まさに彼女らしい内容だな、と授業中聞いて
いた。彼女はたいへんな恥ずかしがり屋さんなのだ。だから
自分自身の実感を伴った発言内容になっている。自身の実感
(価値観)で言える場がある授業だから、発言しようと言つ
気になるのだろう。
それだけで終わらず、後半、再び発言した。
自分の考えを表明するだけで安心してしまっていないこと
が分かる。

21児：雄也くんは、さっき言われたんよ。恥ずかしがり屋
って言うの。あれを取り消して、また新しい意見に変
えたいから言います。(C：まだ反対なん?) 反対よ
反対。友達とけんかするとするやん。けんかしたとき
に謝るうと思っただけど、直接会って話すのはちよつと
いやだ。やめといた方がいいなっていうときに、みん
な手紙をわたしたり、文字で伝えることが多いと思う
んよ。メールで「ごめんなさい」て謝ったりしたら、
少しは話せる。

この意見に対して質問が出た。
本時ではこのときすでに時間がなかったの彼女を指名す
ることができなかった。このような場で、意見を返せればさ
らに自信がくだらうと思っている。今の彼女なら返せるだ
らうという期待はあるのだが。

おわりに

ここまで見てきたように、新聞の投書記事を使った授業では、普段の私の授業では意見を言いきい子も活躍の場があった。特に少数派に属した場合、自分の考えを活発に述べる姿が多く見られた。しかも、そういう姿が一時間の授業時間中、ずっと続くのである。そしてそんなふうには長時間活躍している姿が見られることは私の授業では数少ないことだ。このことは活動している本人のみならず、周りの友達にも、今まで知らなかつた友達の姿を見るということで影響を与えているものである。

(一) 次いで意味では、成果があつたといえる。最後に課題ととらえていることである。次のように最後まで言い切れない子が二人いる。

3児：ぼくは反対で、賛成の人に質問で、もし周りに誰もいなくて、足も使えなくて、動けない状態で、助けも呼べなくて、それで死んでしまう。もし電話があつたら…。えっ、ちよつと考えさせて。

5児：ぼくは、前、由奈ちゃんの意見に異議を言つた佳穂ちゃんに異議で、佳穂ちゃんの言つた…。忘れてしまいました。

言い切れない理由は二人それぞれ違うが、まず、三学期は学級全体に「メモ」を導入しようと考えている。発言のためメモを指導する予定だ。過去の「聞くテスト」のときに子どもたちが書いたメモが残っているはずなので、それを使って指導する予定である。

「話す力」は、話すことの場合を増やすことでしか身に付かないし、伸びないと考えているので、メモを導入することによつて、この子たちの発言回数が増えるようであればそのとき再び考え直すかと考えている。

(二) 自分

私自身が口べたで議論嫌いな人間だ。「なるほど」と聞き入つてしまつた方だ。それが原因か、議論の構成や高めの指示はつきりした何かを教えるのだというのが見えない(私にとつて)場合は特にである。これが例えば、「大造じいさんとガン」のクライマックスはどうか、というような授業では、どの文章を使つて言ふのだろうか、や、この言葉に気づかせたい、という気で子どもの発言を聞くので、私も言えることがある。でも、ここに述べた授業ではついつい「おつ、ちやんががんばつて自分の考えを言つてるではないか!」と喜んでしまつて、学級全体としての議論のあり方というのをなかなか指導できないのだが、このままではいけないといつても思つている。事実なのだ、このままではいけない